

■朝倉孝景 1 武將。戦に明け暮れながら、越前一国支配を実現して“中興の祖”となり、最古の分国法「条々」筆者に仮託された。

あさくらたかかげ

義教鑑引將軍1428＝ 越前守護代の朝倉家景の子に生まれる。幼名は小太郎。

越前国は斯波氏が守護であり、

・・・・・・1437＝ 9歳：

永享の乱終・1439＝11歳： 当主斯波千代徳丸が幼少のため、一族の治部大輔義廉と修理大夫持種、その子の義敏が輔佐していた。

嘉吉の乱・1441＝13歳：

・・・・・・1442＝14歳： この頃、元服して、教景と名乗ったと思われる。

・・・・・・1446＝18歳：

守護斯波氏内で、次第に対立が生じ、

大和徳政一揆1451＝23歳： 元服した千代徳丸義武が病死したため、**斯波義敏が守護になり、その一字をもらって、官途孫右衛門の敏景と改めたらしいが、守護代甲斐将久の傘下に入って、義敏と対立。**

古河公方始・1455＝27歳：

道灌江戸城始1457＝29歳： 翌年にかけて9回、正徹が、敏景のためにと、月次歌会を開くなど、**早くから、京都文化に耽溺し、**

・・・・・・1458＝30歳：***城を一乗谷に築くと、のちに、小京都と呼ばれるようになる街の整備を始めながら、**

寛正大飢饉始1459＝31歳： 甲斐将久とともに、守護斯波義敏を守護として認めないことを連署して、幕府に申し入れするも叶わず、**義敏方と合戦をくりかえすうち、幕府の関東征討の命に従わなかった義敏は、守護職を剥奪され、大内氏を頼って下向。名を教景に戻し、長祿合戦によって、斯波氏はじめ一族内外の反対勢力全てを排除、甲斐将久の急逝もあって、越前における覇権確立に踏み出す。**

・・・・・・1460＝32歳： 阿波賀城戸口の戦い。**帰京時も、自ら国司と称して、殿上人のように振舞っていたともいわれる。**

蓮如御文始・1461＝33歳： **影響力を発揮して、甲斐氏の擁する斯波氏の嫡男を排除、家督を継承させた足利氏支族の子の斯波義廉を補佐、大飢饉で、田楽頭反銭の減免を求める百姓に対し、本所大乘院から、徴収の強行を任せられ、**

寛正大飢饉終1462＝34歳： 鯖江・新庄の戦い、

・・・・・・1463＝35歳： **甲斐氏に替わって、河口庄兵庫郷公文職に就くなど、荘園領主の公家や寺院からも認められ始める。**

・・・・・・1464＝36歳： 強引な手法を怖れた大乘院に名を呪詛されたためか、**孝景と改名。**

・・・・・・1465＝37歳： この年、京都本願寺が比叡山の衆徒らに破却され、蓮如が近江に移る。柚山の戦いなどの***合戦で、次々土豪らを打ち破り、越前の平定を進め、幕府からも、守護斯波氏をしのぐ扱いを受けるようになる。**

・・・・・・1466＝38歳： この間、赦免運動をしてきた斯波義敏の入京が認められ、義廉が退けられて、守護に復帰したのも束の間、山名持豊の政変によって、義敏は再び退けられ、一族追放になり、

応仁の乱始・1467＝39歳： 再び、幕府に出仕した義廉が管領に任じられた直後、応仁の乱が始まると、義廉を奉じ、山名宗全の西軍に加担、義敏の越前侵入を防ぐばかりでなく、

・・・・・・1468＝40歳： 本郷・清水山、志原で合戦をするなど、**めざましい活躍で、西軍の主力となり、なんとか寝返らそうと、東軍細川勝元が勧誘工作、甲斐常治が斯波義敏と結んで、越前に侵攻、**

応仁の乱後、京都文化になじむ一乗谷には、乱を逃れて、公家その他文化人が越前に下向し始め、

蓮如吉崎御坊1471＝43歳： 本願寺第8代法主蓮如が坂井郡吉崎に坊舎を建立すると、在地の土豪層はその門徒となって、農民らとの蜂起を図り、一向一揆が始まる。公然と、**東軍方に寝返り、足利義政の御内書を与えられ、越前の支配権(守護職)を公認される。加賀富樫政親からの加勢が得られないことから、実質的な支配のための合戦には慎重に臨み、北陸道沿いの各所で大勝、**

・・・・・・1472＝44歳： 早くも、加賀の富樫氏が一向一揆の攻撃を受ける。**西軍の拠点府中守護所を陥落させ、甲斐氏を圧倒、**

足利義政隠居1473＝45歳： 富樫政親は弟との家督争いで、本願寺門徒を味方に勝利。細川勝元の死去に乗じた甲斐氏と合戦始まり、

加賀一揆始・1474＝46歳： 政親は味方だった一向一揆に鋒先を向けて勝利、蓮如は吉崎を退去。残った門徒らを、蓮如の子がまとめた加賀三山(寺)が加賀一國支配を確立して行く。4回もの合戦も、いずれも平定、

・・・・・・1475＝47歳： ***同じ東軍ながら、相変わらず反目関係にあった斯波義敏が逼塞して最後まで残った大野郡へ侵攻し、平定、ついに、越前全体に、君臨するに至るが、**

応仁の乱終・1477＝49歳： 中央の応仁の乱は終わるも、斯波氏・甲斐氏との間の反目は収まらず、

山科本願寺・1479＝51歳： 前関白一条兼良が、家領の荘園の返還を求めて、78歳という高齢を押して、越前に下向してきた際も、目的は無視しながらも、大歓迎し、訪問してきた連歌師宗祇は、「老いのすさみ」を著している。

・・・・・・1480＝52歳： 本格的な合戦になる。**応仁の乱終結後も、公家その他文化人の越前下向が常態のようになるなか、**

兼良+一休没 1481＝53歳： **対陣中、腫物を患って、没した。**

直後に、朝倉方が完勝、斯波氏・甲斐氏は追放され、安泰になった。神仏への信仰厚く、儒教にも通じ、連歌にも堪能であった。子の氏景のために書き置いたとされる「朝倉孝景条々(従来十七ヶ条とされていた)」は、合理主義的な考え方がよく表れていて、孝景が、いかに領国経営に苦心していたかがわかり、最古の分国法といわれてきたが、孝景後の話も多く乗せられており、朝倉教景宗滴が、孝景の子孫への覚えとして物語ったものを、家臣が書き留めたものという。絵師曾我蛇足は、家臣であつたらしく、以後、曾我派を形成していくが、その影響で、朝倉家当主は代々絵を描くことに優れるようになる。